

## &lt;記念講演&gt;

## 神経学に魅せられて：若い世代への期待

木村 淳

要旨：日本神経学会は1960年に設立されましたが、当時神経学を学べる施設は、東大、新潟大、九大などに限られていました。僕は、のちに京大総長を務められた平沢興先生の錐体外路系に関する解剖講義に憧れてこの道を志し、インターン修了後すぐ渡米しましたが、1) 神経系が人体のもっとも重要な、人間が人間たるゆえんである脳の機能を主要な対象としていること、2) 複雑難解にもかかわらず理路整然とした学問で、解剖学の知識に基づいて病巣の局在が可能であること、3) 新しい領域で、将来への展望が明るいことなどにも強く魅かれました。半世紀近くを経た今も思いは同じですが、これに加えて分子生物学をはじめとする神経科学分野の目覚ましい発展により、病態の確立のみならず以前は対症療法に甘んじていた多くの疾患にも新しい治療法が続々と開発され、4) 患者の治る神経内科、が神経学の新たな魅力となり、これは僕達のスローガンでもあります。神経学の国内外の進歩にともない、この分野を目指す若い先生方への期待は日増しに大きくなってきました。わが国の神経学は僕がアイオワ滞在中に飛躍的な発展を遂げ、これに貢献された多くの先達が新しい世代に求めるところは、先生方の個人的な経験を踏まえ、千差万別かと思えます。この機会に日米で神経学を学んだ者の一人として、僕の次世代への期待を纏めると、1) 国際的な視野で仕事をする、2) 診断に役立つ新しい技術を開発する、3) 臨床に直結する基礎研究を展開する、そしてそのすべてを集結して4) 患者の治る神経内科をめざすことです。いずれも実現可能な目標ですが、いうはやすく、おこなうは難しの部類です。とくに、実力に見合った国際的な評価を確立するのはわれわれがもっとも不得手とするところで、僕自身の体験でも、海外の学会活動で欧米の学者と互角にわたり合うのはかなり難しく、常に意識的な努力が必要と実感しています。国際学会での論争で、実力は伯仲しているのにいつもこちらに分が悪いのは、主に発表態度の差によるものと考えられます。我が国は儒教の影響もあり、古くから「知るを知らざるとなすは尚なり」の考えが根強く、10を知って1を語るのが良いとされます。その逆にアメリカ人は、幼稚園での「Show And Tell」を手始めに、中学校で習う「Five Paragraph Essay」で鍛え上げられ、1を知って10を語る輩が多いようです。また、日本人は完璧主義ですから、とちっても平気な欧米人とはちがいアドリブの発表が苦手です。英語でも上手く話せなければ、我は黙して語らずと遠慮している人もありますが、外国語ですからBrokenでも当たり前です。僕の国際性の定義は、1) 実力をつけて、あとは対等と自信をもつ、2) 知ってることはどんどんいう、3) 失敗しても愛嬌と思って気にしない、4) 英語は意味がわかればよいので、あえて流暢に喋ろうとしない、ことです。若い先生方がこれからの国際舞台でますます活躍されることを願って止みません。

(臨床神経, 48 : 792—797, 2008)

Key words : 神経学, 英語の論文, 学会発表, 日本神経学会, 世界神経学会連合, 世界神経学会議

## はじめに

僕は幸い学生時代から現在までお師匠さんには大変恵まれていて、国内外の先生方から懇切なご指導を賜りました。教えていただいた事が全部できている訳ではないので、それを受け売りするのは少し後ろめたいところもありますが、自分の心に残ったところを掻い摘んで述べたいと思います。在外邦人のよもやま話で、中堅の先生方には釈迦に説法ですが、若い先生方がこれから国際舞台で活躍なさるのに少しでも参考になれば幸いです。

話の順番として、まず最初に神経学の歴史と魅力、若い世代への期待、海外の指導者から教わったこと、それを踏まえて、アイオワの神経科で習った論文の書き方、学会発表のコツと

司会の問題点、日米の対照的な考え方と日本人気質、そして最後に、国際的な視野と世界神経学会の現状に触れたいと思います。

## 神経学の歴史

西洋医学では、神経系に関する記載は古代ギリシャ、ローマ時代にさかのぼり、紀元前3500年に書かれたものを、紀元前1700年頃に筆写したといわれる「エドウィン、スミス外科パピルス」が最初と考えられています。Lawrence C. McHenryの著「神経学の歴史」は、豊倉康夫、万年徹、井上聖啓先生による名訳が出版されていますが、その中にある4,000年前のものと考えられているエジプト王朝の葬儀の彫刻は、神経疾患の最初の描写といわれ、おそらくポリオによる筋萎縮と

Foot drop と考えられています。瀕死の牝獅子は紀元前 650 年頃の作品で、脊髄に命中した矢による Paraplegia です。古代の記述的な神経学は紀元前 400 年頃ヒポクラテスによりますが、神経は腱や靭帯と同じと考えられ、Neuron は Tendon を意味したといわれています。

漢方医学が中心だったわが国で神経という日本語が登場するのは、今から 234 年前、1774 年に版行された「解体新書」で、玄白は後に出版された「和蘭医事問答」の中で「神気」の神と「経脈」の経とを合わせてこの新語を作ったと述べています。神経という文字は逆輸入で中国でも使われるようになり、この言葉の普及からも解体新書が日本医学におよぼした計り知れない影響を推し量ることができます。

### 神経学の魅力

僕は工学部の出身で医学部は学生生活二度目ということもあり、原則として講義はサボって学外活動に専念していましたが、錐体外路系を始めて記載され、後に総長を務められた平沢興教授の講義だけは努めて拝聴しました。複雑な神経回路の解明が手に取るようにわかる内容で、僕の神経学への興味の源泉になったと思っています。その時代の神経学の魅力を列記しますと、人の機能の中枢、複雑で理論的、日本では未だ新しい領域、欧米ではすでに確立した分野、などが挙げられるかと思います。

その頃から約半世紀経った今も思いは同じで、未だ神経学に魅せられています。神経は人間のあらゆる細胞、組織、あるいは臓器の機能を統御し、固体を一つの行動体として纏めるもので、神経学は最重要、そして解明困難な脳の機能を主要な対象にしています。人間の人間たるゆえんは脳の複雑な精神機能に基づくものでその機能の解明は他の医学分野とは一線を画した存在です。神経学の更なる魅力は診断の合理性にあり、解剖学の知識を網羅し、臨床所見に基づき、責任病巣を局在しうる点にあるかと思います。最近では難病といわれた疾患にも治療法の開発が加速し、まさに僕たちがスローガンとする患者が「治る神経内科」の実現に近づいてきました。

### 次の世代への期待

新しい世代の先生方への期待は沢山ありますが、僕の私見を纏めますと、国際的な視野で仕事を進めること、そして、診断に役立つ新しい技術を開発し神経難病の臨床に貢献すること、さらに、治療に直結した基礎研究を展開して、患者が治る神経内科を目指すこと、などとなります。このような観点では臨床も基礎研究も同様に大切ですが、一人の医師が全領域で卓越する事はできませんから、米国のように、両分野をほぼ完全に分離して共同研究として仕事を進めないかぎり、世界をリードする成果は望めないと考えています。今回は国際的な視野とは何かを中心に述べたいと思います。

### アイオワ州立大学での教訓

日本神経学会が誕生したのは 1960 年のことで当時本邦で神経学を学べるのは東京、新潟、九州などごく少数の施設に限られていました。京都では内科、精神科、脳外科で神経疾患を扱っていて、何処に入局すれば良いのかわからないまま、当時、アメリカで名声を馳せていた Dr. A. L. Sahs に師事するため渡米しました。先生はミネソタの A. B. Baker、ビスコンシンの Francis Forster、ミシガンの Russell DeJong と共に米国神経学の Four Horsemen (4 人の騎兵) の一人で、American Academy of Neurology 設立者として有名でした。レジデントの臨床教育はハンズオンが中心で「聞くのみとは大違い、みるとやるとは大違い」と、現在のワークショップの先駆けでした。臨床医としても抜群で Osler's principle (History is everything) を実践し、レジデントには問診の重要性を教え込みました。

If you have 30 minutes with a patient, spend 29 minutes listening, one minute examining, and no time for EEG.

が口癖で、これは筋電図、MRI などが導入された後もまったく変わりませんでした。僕をふくめアイオワでトレーニングを受けた神経科医は問診で診断が決まらなければ、診察も種々の検査もほとんど役立たないと考えています。医の倫理には厳しく、患者の不利益になる事は避け、Above all, do no harm を標榜し、難病の多い神経科では Compassion (思いやりの心) が無ければ医療は成り立たないと確信していました。これは東洋の精神、孔子の恕(己の欲せざるところ人に施す事なかれ) にきわめて近い考えかたです。

Dr. Sahs の退官後、Dr. Maurice W. Van Allen が主任教授になりましたが、実兄の Professor James A. Van Allen は高名な宇宙物理学者で「Van Allen Belt」の発見者として日本でも名前が良く知れている方です。先生は臨床医としてすぐれていたのみならず Archives of Neurology の主幹を長く務められ、英語の書き方、話し方にはとくに精通し、レジデントやフェローに手を取るようにして神経科の医学英語を教えてくださいました。英語の論文を上手く書くのに苦労するのは日本人だけではなく、アメリカ人にとってもかなり難しいことのようにですが、唯一の外国人だった僕がもっとも恩恵を受けたと感謝しています。

### 論文の書き方

その当時アイオワで学んだ四原則を機会ある度に、若い先生方にお話しています。それを、英語のまま紹介しますと次のようになります。

- 1) Avoid the use of "be" verb, which makes the sentence weak.
- 2) Avoid the use of the same word in one paragraph, let alone, in one sentence.
- 3) Avoid the use of negative sentence.

## 4) Avoid the use of passive tense.

要約しますと、くりかえしを重視した「はなし」言葉とは逆に、論文は冗漫な表現を避け、簡潔にデータを纏める。「be」動詞は文章が平凡になるので避ける。読みやすくするため、同じ単語や表現を一つの文には勿論一つの文節にも重複させない。否定文より肯定文を使い、受身も避けて端的に書く、となります。

日本人が好む表現で欧米ではあまり使われないものも沢山あります。たとえば「On the other hand」は「On one hand」と組んで使われる表現で、医学論文では、ほとんどお目にかかりません。われわれが格好よくしようと書きますと、査読の段階でまちがいをなく除去されます。「As a matter of fact」や「Nevertheless」も同じで（僕は好きなのですが）あまり見かけません。日本人が結語の一部として好む「Further study is necessary」もいわずもがなの発想で不必要のみならず、未確認のデータなら報告するのは時期尚早だ、という印象で逆効果です。

医学論文は小説ではありませんから、文章は簡潔なのが良く、響きは良くても不要な修飾文は止めて置いた方が無難です。査読者の言葉の好みにもかなり左右されるようで、われわれ外国人には理解しがたいところもあります。英文誌に投稿すると、著者の名前だけでNative Checkを要求されます。自信のある方は無視するのが良いと思います。日本人でも日本語を書けない人がいるように、アメリカ人はみな英語が上手なわけではありません。それに神経学がわかってない欧米人に英語だけみてもらってもほとんど役立ちません。

## 学会発表

論文の記載とは対照的に学会発表ではくりかえしが必要で、自分が何年もかけて研究した内容を10分で話して聴衆に理解してもらうのはかなり厳しいかと思います。さらに神経科学関係の研究は難解なことが多く、喋っている本人が内容を完全に把握していなければ、聞き手にわかるはずがありません。日本語でも英語でも同じだろうと思いますが、アメリカでとくに強調されるのは、短い時間に自分の結論を如何に印象付けるかの努力です。

大切なのは、まず聞き手が自分の研究をまったく知らないと自覚すること。したがって、特殊な少人数の研究会以外は、参加者は皆、素人と思って喋るのが原則です。アイオワでは、「Do not try to make them understand, try to make them think they understood」とよく注意されました。日本語では「理解させようとせずに、理解したと思わせるようにしなさい」となります。僕自身は本当にわかってもらえなくても、わかったと誤解してくれるように喋るのが良いと思っています。ポイントの反復も効果的で、同じ事を少なくとも3回くりかえすのが良いとされています。英語では次のように成ります。

- 1) Say what you are going to say.
- 2) Say it.

## 3) Say what you have just said.

短時間に要点を3回くりかえすのはかなり困難で「いうはやすく、おこなうは難し」の類ですが、的を絞れば可能です。このアドバイスは神経科学のように複雑な学問ではとくに重要で、三回くりかえしても理解されないことも多々あります。

## ジョークの功罪

英会話にはユーモアが欠かせません。これが外国人には大変で、ジョークがわかるようになったら一人前とはよくいったものです。最近になって、外国で冗談をまともに理解できない理由は言葉が不自由なだけではなく、その国の生活環境、とくに宗教、習慣、衣食住などに関する知識が無いためとわかってきました。アメリカ人と英国人の間にもお互いに理解しえないことがあるようです。

これはジェスチャーでも同じで、たとえば、前骨間神経麻痺の患者は親指と人差し指で○が作れなくなりますが、この動作はアメリカではOKを表し、頻繁に使われています。しかし、アラブの国では同じOKサインは好ましくない仕草と聞いています。電気生理の検査で、知覚神経電位を指神経から記録するばあい、日本では平気で中指だけを伸ばして人前で説明できますが、アメリカではこれはタブーで、相手を侮辱することになります。この辺の理解がないと大恥をかくことがあります。サウジアラビアで豚のジョークスライドを提示したら、イスラムでは汚れた動物と後から英国の知人に大変叱られました。無知は災いの元だと思いました。

海外では学問的な講演でもユーモアは大事とされていますが、これも時とばあいによります。その場の雰囲気や適当にするのが良いのですが、これはかなり難しく、自信が無ければ止めておくのが無難な感もあります。国際学会でもウイットのある発表が好まれますが、これも度を越すと「内容の薄い話」と思われて逆効果です。僕自身の講演で使ったジョークスライドの数と評価点との関連をしらべたことがあるのですが、何も無いときより4、5枚使ったときのほうが点数は高く、それ以上になると逆に評価が下がる、という結論になりました。

最近少し変わってきたようにも思いますが、日本では学問の講演と笑いは相容れないところがあるようです。京大に赴任してきた当初、米国と同じ調子で喋っていましたら、ジョークスライドで返って場が白けることが度々でした。日本人は生真面目ですから、講演会は肅々と静かに進行しますし、学問の話に冗談はいかがなものかという雰囲気もあります。

## 司会者の役割

最近、わが国の神経学は世界の先端を走っていますから、その実力がみとめられ、国際学会で司会を依頼される先生方も多数あります。これがまた大変難しいようです。言葉の問題もありますが、もっと深刻なのは日本と欧米ではその役割がことなることです。本邦の司会者は、講演の進行役ではなく、最初に演者を紹介し、最後に纏めと謝辞を述べるのが普通です。

これに対して欧米の司会者は講演を予定どおりに進行するのが本来の役目です。したがって、終了前“You have 5 minutes”とか念を押しますし、最後は容赦なく“Would you please close”とか平気で催促します。

欧米の演者は海千山千で、終わりですといわれても、一筋縄では諦めない人も多数います。引き延ばし作戦に使われる表現をいくつか紹介しますと次のようになります。1)これが最後のスライドです、といて安心させ、その一枚で延々と喋る。2)残りがほとんどありませんから、と時間切れを認識している振りをしてなかなか止めない。3)最初の紹介が少し長かったので、と司会のせいにして余分に喋ろうとする。4)纏めます、といてどんどん余分な話をする。5)私は時間厳守ですから、といて油断させ、なかなか締めくくれない。などです。

欧米では司会者も一般席に降りて講演を聞くことが多く、このばあいは後5分くらいになったら壇上の司会者席に戻って来ます。これが一種の合図なのですが、演者の中には“I know I have to shut up if he shows up”などといいながら止めない人もいます。今度司会の労をとっている時こういう輩にでくわしたら、こちらも負けずに司会者の権威を掛けて戦ってください。僕も“You must now stop. Otherwise, I will turn off your microphone!”とかいわれた事があります。このやり方は日本人には苦手です。英語でユーモアを持っていない事情もありますが、むしろ、司会者としての自覚の問題と思います。いずれにしろ、国際学会では状況に応じてアドリブで対応するほうが自然です。

### 日本人気質と American Spirit

私事にわたりますが、僕は大学を卒業してすぐ渡米しましたからアメリカの生活のほうが長くなっています。外国で住むことと国際性とはまったく関係ありませんが、二カ国を行ったり来たりしていますと両方の国の特徴が良くわかります。縁あって散々迷った末、平成元年に母校で教鞭をとるため帰国しました。友人の大半は米国でちゃんとできているのに今更帰って苦勞することは無いという意見でしたが、大先輩の平野朝雄先生や西谷裕先生に励まされて決心しました。帰国を強く勧めてくださった万年徹先生が京大神経内科の先代、亀山正邦教授と同じ研究室だったことも僕にとっては大変好都合でしたし、その他にも神経学会の先達に多数紹介していただき、わが国の特殊事情を教えていただきました。

とくに豊倉康夫先生には公私にわたりお世話になりました。先生は1981年、わが国に世界神経学会を誘致された立役者のお一人で、国際関係のことに深い関心をお持ちでした。1995年に京都の国際臨床神経生理学会に参加された際、日本人とアメリカ人が議論すると、知識は対等でもこちらが何時も不利になるのはなぜでしょうと聞かれた事があります。それで、日本人は10を知って1を語りますし、アメリカ人はその逆で1を知って10を語りますからいい負けられるのだと思いますとお答えしました。

実際、アメリカ人は子供の頃から訓練されていて、人前で喋るのが上手です。むしろ「いわなきや損」みたいなところがあって“Silence is gold”という格言は、在って無きがごときです。儒教からきた「知不知、尚矣、不知知、病矣。老子・莊子」(知りたるを知らざるとするは尚なり、知らざるを知るとするは病なり)の精神は国際レベルでは忘れたほうが無難かと思えます。日本で喋り捲るとあいつは何だと不評をかいますが、アメリカで黙っていると、あいつは馬鹿かと思われまます(もっとも発言すると本当に阿呆だったとわかることもありますけど)。その中間の「知之乎、知之為知之、不知為不知、是知也。孔子」(これ知るを教えんか、これ知るを知るとなし、知らざるを知らざるとなす、これ知るなり)くらいが丁度良いのかもしれない。

### 失敗も愛嬌

皆さんもお気づきと思いますが、日本人とはことなり、欧米の演者は学会講演であまり神経質になりません。発表のとき何がおきても全然平気という印象です。末梢神経疾患では自他共に許す第一人者、P.K. Thomas がまだお元気だった頃、講演開始直前、手違いでスライドが写らなくなったことがありました。われわれならその場で立ち往生して大恥をかくところですが、P.K.はまったく平気で、“You know there are two kinds of talks, those with slides, and those with ideas.”といて、スライドなしで見事な話をしてくれました。

これと対照的に日本の演者は失敗しないよう慎重に喋りますからどうしても堅くなります。それにつられるように聴衆も神経質になっていて、演者がへまをするのじゃないかと心配しながら聞いています。アメリカではまったく逆の傾向で、演者は失敗しても平気ですし、聞き手もずっとリラックスしていて、上手くゆかなくても愛嬌だと思っていますから、その分、冗談も自然に受け入れられるようです。われわれもこれくらいの心のゆとりが欲しいものです。

### 国際性と日本の英語

国際性にもいろいろ定義があると思いますが、私見を纏めますと、1)実力は対等と自信をもつ、2)知ってることはどんどんいう、3)失敗は愛嬌と気にかけない、4)英語は通ずれば良く、流暢に話そうとしない。となります。

勿論、例外の先生方も沢山おられますが、日本人は元来国際舞台が苦手です。言葉の問題もありますが、むしろ態度の問題です。国際学会の仕事をしているとよくわかるのですが、もっと大切なのは対等にやれるという実力と自信です。それではじめて日本の国際化が完成するものと期待しています。これは政治の世界でも学問の世界でも同じです。たしかに英語が国際語になっていますが、これは英米主導で進もうという意味ではありません。むしろ、自国語しかできないアメリカ人はみくびられています。僕は米国からの学会参加が多いので、言葉で馬鹿にされないよう、時々日本語のスライドを出して bi-

lingualであることを強調しています。

坂井会長のように英語をまともに話せる方もまれにありますが、これは例外で、無理にアメリカ人のように喋ろうとすると返って可笑しいものです。僕は仕事の関係で世界各国で喋る機会が多いのですが、「貴方の英語は流暢だ」と褒められたことはありません。7歳になる孫娘が首をかしげてニコニコ笑うような発音ですから無理ありません。しかし「貴方の英語はアメリカ人の英語より良くわかる」とよくいわれます。喜んでよい状況ではありませんが、少なくとも話しは通じているようですし、それで十分と思っています。でも、これは負け惜しみかもしれません。日本人は良い意味でも悪い意味でも完璧主義ですから、いい加減なやり方にはかなり抵抗があります。しかし、あえていえば、失敗も愛嬌と考える図太さも必要で、英語も意味が通じればよいと割り切れば気楽です。若い先生方は実力をつけ、自信を持って外国人と対等に議論し「流暢でなくても平気で喋る」という気概で頑張っていたらいいと思います。

蛇足ですが、最近、日本に輸入されている英語はとても滑稽で思わず笑ってしまいます。無数にありますが、二、三代表的な例をあげますと「アバウト」な話、とか、賞金を「ゲット」しようとか、日本チームは「ビハインド」とか「ジューシー」な果物とか「ベジタリアン」をもじった「ジベタリアン」の類です。「ラジオ」とか「テニス」とか「ペン」とか、欧米から来たもので名詞として使われているものはほとんど違和感が無いのですが、それ以外はすべて支離滅裂な感じです。

でもこういう和製英語も少し慣れてくると、何となく雰囲気が出ていて、悪くないと思うこともあります。僕はとくに「アバウト」なという表現が気に入っています。欧米の言葉に比べれば、日本語には「アバウト」なところが多いので、いえて妙です。「言葉は生きている」といいますから、下品にならず、格調の高いものなら本来の意味から外れてきても、新しい使い方として取り入れるべきなのかも知れません。

## 国際学会

日本の神経学界は1981年、京都で開催された第12回世界神経学会を機に躍進しました。当時は日本で国際学会ができるのか、と疑問視されていましたから、その見事な演出振りにはアメリカから参加していた僕も深く感銘しました。時の世界神経学会理事長、Ruffsum教授がScientific Sessionsも良かったが、Ladys Programは抜群だったと賞賛したので、それ以来同僚者プログラムが旨く行けば、学会は成功だったといわれるようになりました。この年には国際臨床神経生理学会も同時に開催され、この学会は1995年に京都で、さらに2010年、柴崎浩先生を会長として神戸でおこなわれることになっています。世界神経学会の方も、そろそろ日本はどうだろうという期待が高まっています。徳大の梶龍児先生が世界神経学会の役員を勤めてる関係もあり、本学会をふたたびわが国に誘致する絶好の機会かと思えます。葛原理事長はじめ現理事の先生方のご高配をお願い致します。

前回、2001年に開かれたシドニーの会では、その直前に坂井文彦先生が頭痛の国際学会を東京で開かれたので、参加者の取り合いにならないよう努力しました。両学会とも上々の首尾でほっとしたのを思い出します。この準備中にコンベンションサービスの係の人にどの国に一番多く参加して欲しいのか聞いたことがあります。答えは日本とイタリアでした。理由を聞くと、1.日本人は老若多勢が群をなして来る。2.ほとんどが会場の近くではなく下町の宿を予約する。3.しかし、学会初日の早朝、全員揃って会場に現れ登録する。4.参加費を払うとまた全員一緒に下町へ引き上げる。5.そして学会には誰も戻ってこない。とっていました。

最近の国際学会は日本人が参加しないと経済的に成立しないそうで、それもあってわが国への期待は絶大です。次の世界神経学会はバンコック(2009年)ですから是非日本から多数参加していただきたいと思えます。日本人が学会会場に姿を現せないのは一昔前で、英語のプログラムがちゃんと理解できなかったためですが、もうそういう時代は終わりました。若い先生方はどんどん国際学会に出席され、外国勢に負けず討論に加わっていただきたいと思えます。オリンピックと同じで参加することに意義がありますが、勝負はともかく、対等の立場で競うことが大前提かと思えます。そうすれば国対抗のトーナメントでも勝ち残ることができると確信しています。

世界神経学会関係の仕事は国際会議の開催だけではありません。もっと大事な目標は開発途上国の神経科医療を援助することです。可能なかぎりVolunteerを募ってやっていますが、それでも経費がかさみますから募金事業も必要です。そのため米国で世界神経財団という公益財団が設立されています。欧米ではこの種の活動は古くから活発ですが、わが国では伝統がなく最近になりようやく大方の理解がえられるようになりました。その一環として財団法人精神・神経科学振興財団から助成金をいただき、世界神経学会のニュースレター、World Neurologyを過去5年間発刊いたしました。現在はアフリカ支援が一つの目標で、日本神経学会もこのような国際的プロジェクトに積極的に参入して頂きたいと思えます。

纏めますと、次の世代の若い先生方が欧米の研究者と対等にわたり合える実力をつけ、自信をもって国際舞台で活躍される事を期待しています。坂井会長に続き来年は糸山泰人先生が日本神経学会総会を仙台で主催されます。これら国内学会での成功をばねにして、次の世界神経学会でも同じように頑張っていたらいいと思えます。また国内外の学際的活動のみならず、開発途上国への支援など神経科領域の発展に国際的視野で貢献されることを念じて止みません。

## 文 献

- 1) 第12回世界神経学会組織委員会：第12回世界神経学会報告書、京都、1981年9月20-25日
- 2) Lawrence CM Jr, 豊倉康夫監訳：萬年 徹, 井上聖啓訳：神経学の歴史 ヒポクラテスから近代まで、医学書院、東京、1977
- 3) Walton J: Chapter 20 World Federation of Neurology in

- The Spice of Life, Royal Society of Medicine Services, William Heinemann, 1993, pp 573—588
- 4) 平野朝雄：1. 神経領域の100年 3. アメリカの神経学と日本の神経学. 日本内科学会雑誌 創立100周年記念号 2002 ; 91 : 25—28
- 5) 木村 淳, 木村彰男：世界からみた日本の医学. 総合リハ 2003 ; 31 : 188—193
- 6) 木村 淳：世界からみた日本の神経学会. 臨床神経学 2005 ; 45 : 802—805

### Abstract

#### Neuroscience in Japan: Its charm and challenge for future generations

Jun Kimura, M.D.

Department of Neurology University of Iowa Health Care Iowa City Iowa, USA

The Japanese Society of Neurology (JSN), founded in 1960, gained the momentum after the 12th World Congress of Neurology (WCN) held in Kyoto (1981) and currently enjoys an indisputable reputation as a major contributor to neuroscience. Despite this achievement, we often find it difficult to debate with an English-speaking opponent. Our traditional teaching emphasizes silence rather than eloquence as the virtue with the dictum not to dwell upon your knowledge base (learn 10, speak 1). This practice would make it difficult for us to compete against those trained to elaborate even on limited information (learn 1, speak 10). To counter our timidity, we must develop self-confidence, learn to express our views fully and abandon the impractical spirit of perfection in favor of candor. From my vantage point working with the World Federation of Neurology (WFN), science talks “broken” English at an international conference such as WCN. Thus, it suffices that we speak clearly, if not fluently, to effectively participate in global affairs. Last but not least, we must seek the sovereignty of neurology world wide as advocated by WFN. I hope members of the JSN will have a continued success in their pursuit of international recognition, which they so justifiably deserve.

(Clin Neurol, 48: 792—797, 2008)

**Key words:** neuroscience, international recognition, academic presentation, JNS, WFN, WCN

---